

外国文化との接触に限定すること

以上のように、日本における日本分野というのは巾が広く、研究の肌理も細かく、その全体を対象とするならば、この特定領域全体を利用しても、まだ足りないということになる。従って何らかの制限を加える必要がある。他の分野との連関ということを考えて、外国文化との接触という方向が考えられる。

外国文化との接触と言え、日本が文献時代に入った時からすでに中国文化・朝鮮文化の影響を受けており、文献時代以降のすべての時代が対象になりうるが、ここでは、大まかに三つの時期に分けておく。

第一の時代は、文献時代以降、遣唐使の廃止されるまでの中国文化の直接の影響のある時代とそれを消化吸収する時代、次は、鎌倉・室町時代の、五山文化と呼ばれる禅宗を中心とした中国文化の影響の時代、次は、室町時代のヨーロッパ文化、とくにキリシタン文化の影響の時代である。第一の時期の、中国文化の影響については、この20年の間に、優秀な研究者が輩出し、研究がかなり進んでいる。研究分野も細分化されて、かなり成熟した分野となっている。ところが五山文化とキリシタン文化については、研究人口も少なく、研究成果も多いとは言えない。まだ、資料の整理さえ終わっていない部分を残している。そこで、このような特定領域研究が充足する以上は、文献時代以降の時間の流れの中で、大きく欠落しているこの二つの分野を補うことによって、日本の歴史、文学の歴史、宗教の歴史の灰色の部分に光を当てるべきであろうと考え、この二つの分野を、特に重視するという方針をとった。

古典学の将来とコンピューター

日本分野では、基礎的研究が一段落すると、研究論文の数が少なくなり、その数少ない論文も評論的なものになりがちになる。口語訳がたくさん出版されると、原典を原文で読まずに済ませる傾向も出てきて、読解力のない研究者も多くなっていく。総じて言えば、古典の研究者の数が少なくなり、実力の低下が見られる。これは、世界中で共通している現象らしく、古典学の風化とか古典学の変質と呼んで良いであろう。こういう危機感は、この特定領域研究の発足の理由の一つでもあった。

古典学というのは、これまではある意味では職人芸に頼っていた部分が大きかった。一人の研究者が研究対象とする文献の索引を作り、分析するというやり方でやってきたが、コンピューターによって多くの文献がテキスト化され、それが共有されつつある現在では、そういう職人芸が通用する範囲がかなり限られてくるようになっ

た。テキスト化された多くの文献は、パソコンによって、数秒で一気に検索され、これまで用例探しに費やしていた時間が不要無くなりつつある。これによって、他の分野の調査、異なった視点から考察する時間的余裕ができるはずであるが、そういう成果を得る前に、文献のテキスト化という大作業が残っている。テキスト化するためには、どの本を底本とするかという問題、異本をどのようにするかという問題、そしてテキスト化した後の校訂作業も重要な大作業である。もちろん外字の処理など、この特定領域研究の「A03 情報処理」の扱う問題があり、この「A03」の担う責任はきわめて重要である。

大量のデータを短時間で検索することができる状況になったときには、注意して置かなければならないことがある。それは、電子テキスト化された後は、そのテキスト化の際に考慮された様々な問題が捨象されてしまい、すべての文章が対等の重みを持つように錯覚しがちで、逆に、研究が浅くなってしまふという懸念があることである。つまり、索引や電子テキストを利用した研究では、章や巻による相違、異文の処理、写本の違いなどが無視されがちで、用例は集めるけれども、それらの用例の背景までは考察されず、すべてが同じ重みで利用されるようになりがちで、これまでの職人芸の部分が欠落したまま、資料を平板な均質的なものとして利用してしまふ傾向が生じやすいという訳である。コンピューターに入力されたテキストに、テキスト以外の情報をどれだけ入れることができるのかということ、もしくはテキストにどういう附載資料を付けることができるのかということが、これからの課題になろう。

中国における古典意識の成立

興膳 宏

中国の古典の歴史はきわめて長い時間にわたりますので、ここでは古典の意識が確立された初期の段階に焦点を絞りながら、特徴的な問題点をお話したいと思います。

中国の典籍は少なくとも前漢末以来、国家的な事業として、管理・保存が継続的になされてきましたが、その直接の源流は西暦紀元前二世紀の漢の武帝の時代に始ま

ります。武帝は儒者董仲舒の献策を容れて、易・書・詩・礼・春秋の五経博士を置きました。すなわち国のアカデミーに五つの部門を設けて、これらを国家公認の学問としたのであり、いわゆる儒教の国教化です。これは儒家の思想を基準として、当時存在したもろもろの典籍の位置づけを定めるという意味をも持つことになりました。五経の「経」は、織物の「たていと」が原義で、長い一枚の織物の端から端までを貫く縦糸のように、終始変わらない「つね」の意を表わしています。つまり儒家の典籍である「経書」は、人間の行為の永遠の規範となるありかたを示した書として、絶対的な価値を公認されたということになります。それに対して、道家や法家などの諸子をはじめとする他の典籍は、経書を基準としてその価値を相対化されたといっただけでしょう。ここに国家による典籍管理の歴史が本格的に始まることになります。

もっとも、国家による典籍の管理を考える際には、武帝の時代をさらに一世紀さかのぼる秦の始皇帝による焚書のことをその前史として考慮しなくてはなりません。『史記』の秦始皇本紀には、始皇帝が命を下して、「天下に敢えて詩・書・百家の語を蔵する者有らば、悉く守尉に詣りて之を焼く」とあり、また「去らざる所の者は、医薬・卜筮・種樹の書」とあります。これは、読んではならない書として、詩（詩経）・書（尚書＝書経）などの儒家の書や諸子の書を指定し、読んでもよい書として医薬・卜筮・種樹などの自然科学や技術系統の書に範囲を定めて、両者の価値を相対化したことを意味しています。

さて、国家による典籍管理の具体的な形は、紀元前一世紀末の前漢末期に現われました。劉向・劉歆父子による古典籍の整理と目録編纂の事業がそれです。劉向は国立図書館に蔵される典籍をもとに、各種のテキストを収集して、それらの精密な校勘により定本を作成し、また書名を確定した上で、各書について解題を著わしました。それを「別録」といいます。現在「別録」の一部が伝わっていますが、そこには必ず「殺青を以て書し、繕写せしむ」という決まり文句が見えます。それは、「殺青」、すなわち竹簡を焼いて油を除いたものにテキストを写し、いずれ帛に浄書して流布できるように備えておくという意味です。劉向はこの事業の半ばで亡くなったため、息子の劉歆がそれを引き継ぎ、『七略』という最初の典籍目録を編纂しました。これは中国の典籍の歴史の上で非常に大きな意義のある仕事でした。『七略』そのものは亡びましたが、その内容は後漢の班固の『漢書』芸文志（以下、『漢志』と略称）にそのまま伝えられています。

以下、『漢志』によって、その分類の基準を示しておきます。『漢志』の藍本である『七略』の名称が暗示す

るように、この書目は名目上七類に分かたれています。それを列举すれば、輯略、六芸略、諸子略、詩賦略、兵書略、術数略、方技略となりますが、最初の輯略は全体の序のようなものなので、実質上は六類に分かたれていることとなります。その六類はさらに次のように下位の部類に区分されています。

- 1 六芸略 易，書，詩，礼，楽，春秋，論語，孝経，小学（9）
- 2 諸子略 儒，道，陰陽，法，名，墨，縦横，雑，農，小説（10）
- 3 詩賦略 屈原賦等，陸賈賦等，孫卿賦等，雑賦，歌詩（5）
- 4 兵書略 兵権謀，兵形勢，陰陽，兵技巧（4）
- 5 術数略 天文，曆譜，五行，蓍龜，雑占，形相（6）
- 6 方技略 医経，経方，房中，神仙（4）

この分類法が、以後の図書目録の基本として、いくらかの変更を伴いながら踏襲されてゆきます。うち「六芸略」は、経書とその注釈書を収めた部類で、六類の中で圧倒的な力を擁しています。経書そのものの数は一定していますが、その注釈は時代を逐って増えつづけるので、この部類に属する典籍は以後も増加の一途をたどることになります。『漢志』以降、典籍はその媒体が竹帛から紙へと移ったことにより、普及が容易になった事情もあって、加率的に増加をつづけますが、歴代王朝による典籍の管理は、目録作成という形で持続的に継承されてゆきました。『漢志』に次いで現存する第二の図書目録は、七世紀初めに編まれた『隋書』経籍志（以下、『隋志』と略称）です。これは非常によくできた書目で、むしろ漢から唐に至る六朝四百年間の学術・文化の歴史といったほうがふさわしい内容を持つのですが、そこではすべての典籍が次のように六部ではなく四部に分類されています。

- 1 経 易，書，詩，礼，楽，春秋，孝経，論語，讖緯，小学（10）
- 2 史 正史，古史，雑史，霸史，起居注，旧事，職官，儀注，刑法，雑伝，地理，譜系，簿録（13）
- 3 子 儒，道，法，名，墨，縦横，雑，農，小説，兵，天文，曆数，五行，医方（14）
- 4 集 楚辞，別集，総集（3）

このほかに、仏典を集めた「仏経」と、道教の教典を集めた「道経」が枠外の典籍として扱われています。この四部分類法は、このあとずっと受け継がれてゆき、今日でも清朝までの古典籍の処理にはこの分類法が伝統的に用いられております。

四部の中味を検討してみますと、まず「経」は子目に「讖緯」が加わっただけで、あとは排列の順序も含めて、

『漢志』とほとんど異同がありません。第二の「史」は、『漢志』にそのまま相当する部類がありません。もちろん史書が存在しなかったわけではなく、『漢志』ではこの種の書は、たとえば『太史公書』（『史記』）のように、六芸略のうちの春秋類の一部として録されていました。歴史事実を記録する書は、時間の蓄積とともに膨張するのは当然ですから、『隋志』では春秋類の付録では収まりきれなくなり、ついに独立の部を成すに至ったというわけです。

第三の「子」は、諸子のことですが、漢代までの諸子の学は、陰陽家・法家・名家など、その思想のエッセンスを儒家に吸収されて衰退してしまった結果、独立の学派としての存在感を急速に喪失してしまいました。いいかえれば、儒家は決して古代の原始儒家から恒久不変の教えを保っていたのではなく、随時に諸子の思想の中から貪欲にエッセンスを吸い取って、その存在基盤を確固たるものに育て上げていったのです。先秦諸子の学派の書は、『隋志』では道家などを除けば、ごくわずかしが著録されていません。一方、自然科学や技術系の書は、新陳代謝をくり返しながらかつ増えつづけ、これらの書が子部に繰り入れられた結果、子部全体の典籍はかなりの数に上っています。

第四の「集」とは、詩文集のことで、『漢志』の詩賦略を拡充した部類であり、広義の文学に相当するといえます。これも史部の場合と同じで、六朝いらい時代を逐って増えてゆきましたが、その背景には、ことに唐代以降、詩文が科挙の試験科目として課せられたことも作用して、詩文の創作が知識人の必須の教養となったことがあります。

ここで『漢志』から『隋志』への変動を整理して、対応関係を図示してみると、次のようになります。

- | | | |
|---|-----------------|---|
| 1 | 六芸略 | 経 |
| 2 | | 史 |
| 3 | 諸子略・兵書略・術数略・方技略 | 子 |
| 4 | 詩賦略 | 集 |

国家が典籍を管理し、保存することは、最後の王朝である清まで持続しましたが、その事業はすべて経・史・子・集という『隋志』によって確立した四部分類を枠組みとして実行されたのです。国家による典籍の管理・保存は、また同時に一種の言論統制の意味を併せもっていました。ですから、十八世紀の清の乾隆帝の時代に編纂された『四庫全書』という空前の規模の大コレクションも、基本的には劉向父子の事業をより大規模な形で踏襲したものであるとともに、一方で禁書にすべき書を洗い出す役割も果たした点では、かの秦始皇帝の断行した「焚書」の継続でもあったわけです。つい近い過去の文化大

革命のころでも、あらゆる書の刊行が停止されて、刊行を許されていた書が一時期は『毛沢東選集』と自然科学や技術関係のものだけになっていたことは、なお私たちの記憶に新しいところです。

ところで、もう一つぜひ見落としてならないのは、『漢志』から『四庫全書』に至るまでの典籍目録に収められる書は、書かれている文体でいえば、ほとんど例外なく「文言」と称される書きことばのスタイルで統一されていることです。中国では、地理上の広大さとそれに起因する方言の多様性とのために、非常に早くから書面言語が定着していて、書物のことばはすべてこの「文言」という、日常の言語生活からは意識的に分離された特殊なことばによって書かれていました。しかし、話すとおりに書かれた文章にこそ人間的な真理は宿るとする考えかたも古くからあり、唐の禅僧や宋の儒者の語録には、意識的に口語の語気が取り入れられています。元では「雜劇」と呼ばれる演劇、また明では白話小説がこれらの時代を代表する文学ジャンルとして人気を博したことは周知のとおりです。もちろんそうした文学が、典籍とは無縁の民衆に広く支持されていたものであったという事情もあります。

しかし、旧社会の典籍に対する基準からすれば、演劇や小説などは全く対象外の存在でした。これらのいわゆる俗文学が中国文学の重要な一分野であることが自覚されて、旧来の詩文と同等の市民権を得るためには、近代になって西洋の学術・文化との接触がなされるまで待たなければなりません。儒教という旧社会の絶対的な權威の呪縛から解放されるためには、表現形式の自由という条件が缺かせなかったというべきでしょう。「文学革命」の首唱者であった胡適は、新しい文学の創造のために八つのことから手をつけることを主張しています。そのうち前半の四つには、典故を用いないこと（不用典）、常套的な表現を用いないこと（不用陳套語）、対句を用いないこと（不用对仗）、俗字俗語を避けないこと（不避俗字俗語）が挙げられていますが、彼がなすべきでないとい強く主張しているこれらのことこそ、実は旧来の典籍の表現形式上の特色だったことに注意しなければなりません。その意味で、表現はそれに包まれる内容とまさに一体の関係にありました。「文学革命」が文言的要素の否定から始まった理由はそこにあったのです。